

## 邪馬台国は北九州甘木市付近にあった

安本 美典  
(産能大学教授)

川崎市宮前区けやき平1-20-103

卑弥呼の国、邪馬台国はどこにあったか。私は北九州の甘木市付近にあったと考える。以下にその理由を述べる。

### 古代の天皇の平均在年数は、約10年

『三国志』の『魏志倭人伝』は、238年（景初2年。これは239年、景初3年の誤写または誤刻とする説が有力）ごろに、女王卑弥呼の使が魏に貢献したと記している。

238年ごろといえ、わが国のどの天皇の時代なのだろうか。

わが国の古代のことを記した文献としては『古事記』と『日本書紀』とがある。

『古事記』本文は、各天皇の即位などの事件のあった年月日を記していない。どの天皇のつぎに、どの天皇が立ったかを記しているだけである。

『日本書紀』は、神武天皇以下歴代の天皇の記事において、即位をはじめとする種々の事件のおきた年月日を記している。しかし、『日本書紀』の年月日の数字は、たとえば、神武天皇が127歳まで生きたとし、孝安天皇の在位期間を102年とするなど、信頼できない。

『古事記』と『日本書紀』とでは、年紀や個々の事実などについては、かなりくいちがいがある。しかし、天皇の代の数については完全に一致している。

また天皇の代の数は、天皇の年齢や治世年数のような、それ自体としての不合理さをふくんでいない。年紀や天皇の年齢などは、記憶に残りにくい面があると思われる。それにくらべるならば、ある天皇にあたる人物が存在したという事実は、より記憶に残りやすいだろう。天皇の代の数は、年紀などよりも、はるかに信頼できる所伝であると思われる。

そこで、私は、天皇の代の数（系譜）によって、個々の天皇の活躍の時期を推定してみた。即位、退位の時期などを、歴史的な事実として信頼できるのは、第31代用明天皇ごろから以後である。用明天皇からあとの天皇の在位年数などは、『古事記』と『日本書紀』とでも一致している。（異なっている場合でも、1年である。）

いま400年ごとにまとめ、天皇の平均在位年数を算出してみると図1のようになる。これで見れば、確実な歴史時代にはいつてからは、時代をさかのぼるにつれ、天皇の平均在位年数は、短くなっていることがわかる。

実年代がはっきりしている古代の諸天皇は、データが確実で、しかも知られるかぎりの古い時代では、天皇の平均在位年数は、約10年で安定している。

そこで、この平均在位年数を用いて『古事記』『日本書紀』の天皇の代の数をもとに、推計学的方法で、推定の誤差計算をおこないながら、邪馬台国の女王卑弥呼の活躍していた3世紀の初頭は、わが国の史料に記されているだれの時期にあたるかを、推定してみる。

すると、かりに記紀のつたえる古代の天皇のすべての実在を信じたとしても、神武天皇の時代は、卑弥呼の時代にとどかず、邪馬台国の時代は、神話時代にあたり、大和朝廷はまだ成立していなかったことになる。

卑弥呼については、これまで『日本書紀』の記すように神功皇后とする説、倭姫とする説（内藤湖南説）、倭迹迹日百襲姫とする説（笠井新也説）などがあつた。

しかし、神功皇后、倭姫、倭迹迹日百襲姫の活躍の時期は、卑弥呼の活躍した時期とまったく重ならない。いずれも、卑弥呼から100年ないし150年ていどあとの人となる。

卑弥呼の時期と重なるのは、神功皇后より5代まえの天照大御神<sup>あまてらすおおかみ</sup>ただ1人である。

#### 女王が皇祖神である理由

天照大御神と卑弥呼とでは、活躍の時期ばかりでなく、つぎのような点も、よく一致するように思える。

- (1) 天照大御神も卑弥呼も、ともに女性である。
- (2) ともに宗教的権威をそなえている。

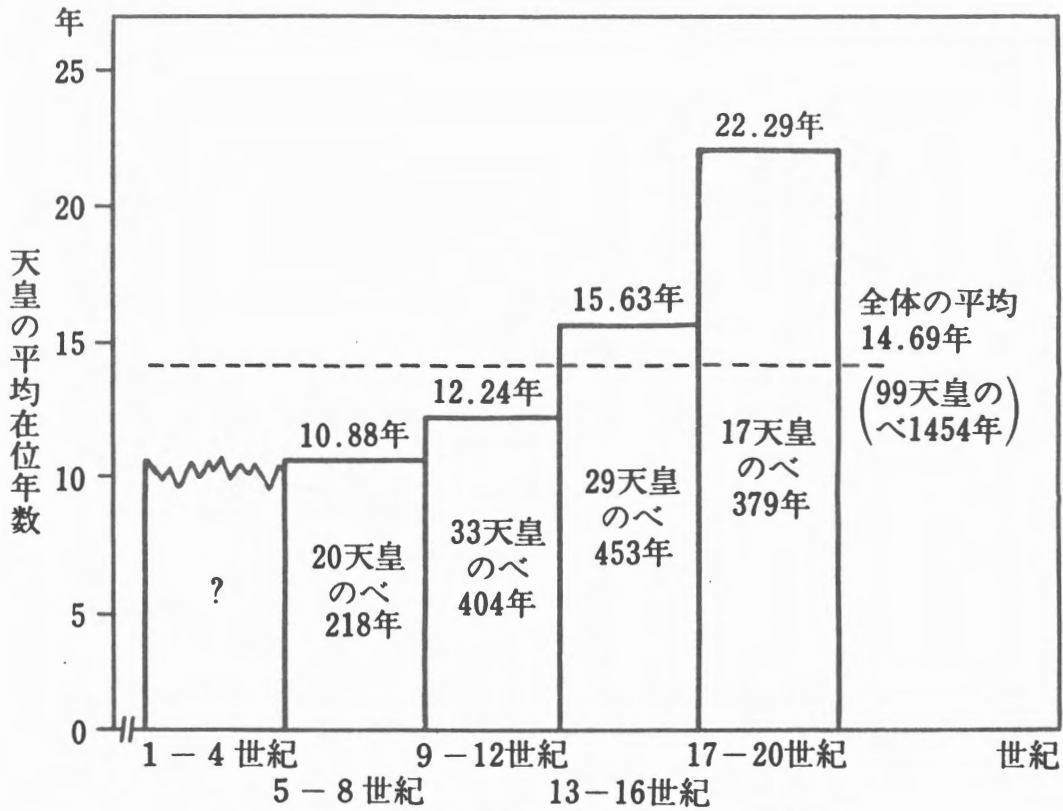


図1 世紀別天皇平均在位年数

- (3) とともに夫をもたなかったようである。
- (4) 卑弥呼には、弟がいたことになっている。天照大御神にも  
須佐之男の命、月読の命という弟がいる。
- (5) 『古事記』には、「天照大御神、高木神二柱の神の命をもちて」などの記述がしばしば見られ高木神は、天照大御神といっしょに、しばしば命を下したりなどしている。『魏志倭人伝』の、女王のことばを伝えるために出入りしている1人の男と、高木神とが符合するように思われる。
- (6) 魏の天子は、卑弥呼に「親魏倭王」の称号を与えている。卑弥呼は「倭」の女王であった。いっぽう『古事記』には、神武天皇を神倭伊波礼毘古命と呼んだように、「倭」の文字がしばしばあらわれる。のちの時代、大和朝廷こそ「倭」であった。したがって、卑弥呼にあてる人物は、『古事記』『日本書紀』に記されている大和朝廷の関係者のなかから求めるべきであろう。とすれば、その関係者のなかで、まず時代の合致する人が卑弥呼であると考えるのが、自然であるように思われる。

以上のほか、天照大御神は大和朝廷の皇祖神であり、卑弥呼は邪馬台国の女王であるが、この大和と邪馬台国の音が類似していること、卑弥呼の宗女、台与にあたる人物をわが国の史料に求めうること、卑弥呼の死後の争乱にあたると思われる記述が『古事記』にあることなど、いくつかの点でも符合する。

### 『古事記』神話の舞台は九州と山陰

事跡や年代のうえで、卑弥呼と天照大御神とが重なりあうとすれば、天照大御神が活躍していたと『古事記』『日本書紀』の伝える「高天の原」こそが、邪馬台国のことを、神話的に伝えたものであることになる。

『魏志倭人伝』と『古事記』『日本書紀』の記述との2つの鍵をあわせ用いるばあい、卑弥呼のいた場所は、ほぼ決定できるように思われる。中国がわの記述と日本文献とは、割符となって、1つの歴史事実を語っているようである。

以下の分析において、私は、テキストとして『古事記』のほうをおもにもちいる。それは、『古事記』のほうが、『日本書紀』よりも、より古い伝えをとどめているように思われることと、政治的な作為がすくないと考えられることなどのためである。

しかし、『日本書紀』を用いて分析をおこなっても、『古事記』と、ほぼおなじ結論に達す

るものと思われる。

さて、『古事記』神話（正確には、『古事記』上巻におさめられている説話）のおもな舞台は、どこであろうか。それを定める手がかりをうるため、まず『古事記』上巻にあらわれる地名の統計をとってみる。

統計した地名を、927年にできた『延喜式』の行政区分を一応の基準として分類すれば、図2のようになる。図2において、カッコ内は、説明と訓みである。たとえば「胸形」という地名があらわれたばあい、胸形は筑前の国に属するので、西海道（九州地方）の地名が一つとして統計されている。統計の結果を整理すれば、図2のようになる。

図2をみれば、『古事記』神話のおもな舞台は、九州と山陰であることがわかる。

九州の地名は、畿内の地名の3倍以上もでてくる。もし、津田左右吉らが説くように、『古事記』の神話などは、大和朝廷の役人たちが、大和朝廷の権威をたかめるために、机上で述作したものであるならば、畿内の地名が、もっとも多くあらわれてもよさそうなものである。しかし、事実は、そうになっていない。

『古事記』『日本書紀』の神話は、大和朝廷の祖先たちがいた場所を、おぼろげな形で伝えているとみたほうがよいのではなかろうか。そして、その場所は、九州方面である。

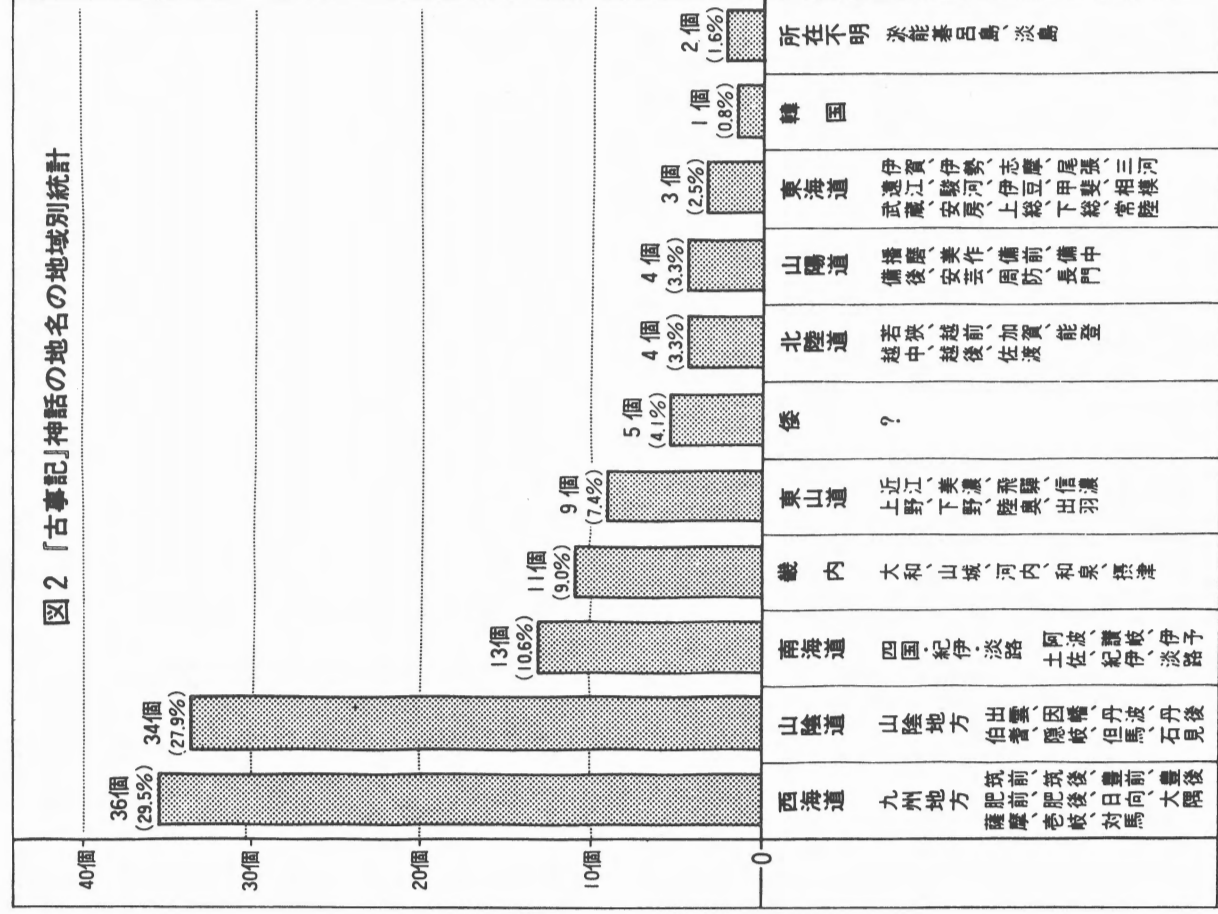
### 「高天の原」を思わせる地は、筑前の国の夜須郡

天照大御神の都した高天の原について考えてみよう。高天の原は、九州にあったと考えられる。では、天照大御神が直接住んでいたのは、九州のどこであろうか。

それを定めるために、『古事記』上巻に記されている高天の原の環境を整理してみよう。

- (1) 高天の原には、「天の安の河」が流れている。その河原に、多くの神々が集まって、会議を開くことができた。すなわち、「天の安の河」はそれほど小さな河ではない。
- (2) 田があり、田には畦あぜがあり、溝みぞがひかれていた。天照大御神が、その田の新穂を召しあがる祭殿まつりどの（大管おほくわを聞こしめす殿との）もあった。また、天の安の河のほとりには、「天の真名井まない」とよばれる井戸があり、馬（天の斑馬あまのこま）や鶏もいた。すなわち、あるていどの平地がひらけていた。
- (3) 高天の原には、天の安の河上に、「天の岩屋」があった。また天の安の河

図2 「古事記」神話の地名の地域別統計



上から、堅い石（<sup>かたいし</sup>堅石）や、鉄（<sup>かなやま</sup>天の<sup>まがね</sup>金山の鉄）をとってくることできた。さらに、「<sup>いわくら</sup>天の岩位」（高天の原なる岩石の御座）ということばもあらわれる。すなわち、天の安の河の河上には、岩石のある山があった。また、高天の原には、堅い地面（<sup>かたいわ</sup>堅庭）があった。

このように高天の原はいちじるしく地上的特徴をもっている。これらの条件をみたく場所を九州に求めることができるだろうか。

「高天の原」の性質を示した（1）から（3）で、まず手がかりになりうると思われるのは、「天の安の河」である。なぜなら、これはあきらかに固有名詞であり、しかも、かなり大きいと思われる河の名だからである。そして、のちに述べるように、地名は年月の経過にも耐えて、ほとんど昔の地名のままに残ることがきわめて多いからである。

では、九州に「ヤス」とよばれる河、または、河のほとりの地名で「ヤス」とよばれるところがあるだろうか。

地図をひらいてみよう。たしかに、北九州の中央部、福岡県朝倉郡に<sup>よす</sup>夜須町とよばれる町がある。甘木市の近くである。そして、この地はさきの（1）から（3）までの条件を、かなりみたしているようである。

夜須町のすぐ近くを筑後川の支流が走っている。川の下流に向けて平野がひろがり、筑紫平野につながっている。夜須町は、北九州のほぼ中央の位置をしめる。川の上流には、山々がならぶ。そして、「夜須川」（安川）という川も流れているのである。

「夜須川」の「夜須」は、『日本書紀』の「神功皇后紀」や『万葉集』に「安」と記されている。また、『延喜式』にも、筑前の国夜須郡としてみえているから、かなり古くからの地名であることはたしかである。夜須町の「夜須」は古くは一般に「安」と書かれ、おそらくは、元明朝の和銅6年（713）の、「郡郷の名（地名）は、今後、好ましい漢字2字で表記せよ。」のいわゆる『風土記』撰進の勅以後、「夜須」と書かれるようになったのであろう。甘木市を流れる筑後川の支流、小石原川（甘木川）は、夜須川ともよばれる。

吉田東伍は、その著『大日本地名辞書』（富山房）のなかで、つぎのように述べている。

「小石原、小石原村という。秋月の東4里（16キロ）、両豊（豊前、豊後）の<sup>くにさかい</sup>州界に接近し、夜須川の渡りである。この川の名を小石原という。秋月に至り、南方に折れ、甘木を過ぎ、ついに筑後川に入る。長さ9里（36キロ）。」

明治初期に、福岡県が編集した『福岡県地理全誌』でも「夜須川」と記されている。

1954年に、朝倉郡の2町（甘木・秋月）、8村（安川・上秋月・立石・三奈木・金川・蟪城・福田・馬田）が合併して、市制をしき、甘木市となるまで、安川村があった。「安川村」は、1889年（明治22年）の町村合併により、それまでの、長谷山村・千手村・甘水村・楢原村・隈江村・下淵村・持丸村の7村が合併して成立した。「安川村」の名は、「夜須川」に由来する。『明治22年町村合併調書』（福岡県資料第2輯）には、つぎのようにある。

「安川（小石原川）という村名は、人々の希望するところで、合併村の中央を流れ、村内過半その川を引き、用水とする。よって安川村と改称する。」

これで見ると、「夜須川」または「安川」とも書かれたことがわかる。

### 香山も存在している

『古事記』神話のおもな舞台が九州であり、その九州に、現在も『古事記』神話に名のみえる「安川」と同じ名の川が流れており、「ヤス」の地名が残っている。ふしぎなことではなからうか。

しかし、ふしぎは、それだけではない。「安川」によって、ふしぎの第1の扉がひらかれるとすれば、「香山」によって、ふしぎの第2の扉がひらかれる。

日本神話には、「天の香山」（『古事記』『日本書紀』では、香具山は、「香山」と記されている）という地名が、何度かあらわれる。この「天の香山」は、大和の「天の香山」のことであると、考えている人が多い。

しかし、「香山」という山は、夜須町や甘木市の近くにもある。日本神話にあらわれる「香山」は、九州の「香山」をさしている可能性もある。いや、神話の舞台が、おもに九州であることを考えれば、神話にあらわれる「香山」は、むしろ、九州の「香山」をさすとみるべきであろう。

夜須町や甘木市の東南にある香山は、現在、高山こうやまと書かれることが多い。しかし、昔は、「香山」と記した。江戸時代前期の儒者、貝原益軒が、元禄16年（1703）に編集した『筑



前国統風土記』には、「志波村の香山」と記されている。戦国時代に、香山に、秋月氏の出城があった。天正9年（1581）のころ、秋月種実が大友氏との戦いにおいて、8000余人で「香山」に陣取ったことなどが、『筑前国統風土記』に記されている。香山には、現在、「香山城址」の碑がたっている。

また、大和の天の香具山も、昔、「高山」と書かれたこともあることは、『万葉集』の「高山（香山）は<sup>うぬひまき</sup>敵火雄雄しと」の歌によって知ることができる。

さらに、『筑前国統風土記』によれば、北九州の香山（高山）のある旧志波村の付近は、ふるくは、「<sup>とまち</sup>遠市の里」とよばれていた。いっぽう、畿内の天の香山は、『延喜式』に十市郡にあると記されていることからわかるように、ふるくは、「<sup>とほち</sup>十市郡」（「とほち」の読みは、『延喜式』による）に属していた。そして、『和名抄』にみえる「美濃国本巢郡<sup>とほち</sup>遠市郡」が、藤原宮出土の木簡では、「三野国本須郡<sup>とほち</sup>十市・・・」となっている例がある。古代においては、「遠市」と「十市」の音は、等しかったか、または、きわめて近かったと考えられる。

九州でも畿内でも、「遠市」または「十市」と呼ばれる場所に、「香山」という山がある。これも、ふしぎなことではなかろうか。

地名は時の流れにも摩滅せず、きわめて残りやすいものである。

927年にできた『延喜式』の巻の第22をみれば、九州地方（西海道）の郡の名として、95の郡名がのせられている。そのうち、現在も郡の名としてそのまま残っているものは、55郡ある。60%近く（57.9%）は、千年以上の歳月にもたえて、そのまま残っている。

また、生葉→浮葉、三毛→三池、築城→築上、伊作→伊佐のように、ごくわずか変化しているものや昭和になってから消滅した郡名、さらに<sup>いと</sup>怡土郡と志麻郡とが<sup>いっしょ</sup>いっしょになって糸島郡に、喜麻郡と穂浪郡とが<sup>いっしょ</sup>いっしょになって喜穂郡に、三根郡と養父郡と<sup>もと</sup>基肆郡が<sup>いっしょ</sup>いっしょになって三養基郡に、飽田郡と託麻郡が<sup>いっしょ</sup>いっしょになって飽託郡になったように、『延喜式』の郡名を一部残している現代の郡名を加えるならば、95郡名のうちの、71郡となる。約75%（74.7%）である。

さらに市町村名として残っているものを加えれば、95郡のうち、80郡名が残っていることになる。84.2%である。

そして、市町村以外の地名として残っているものや、昭和になって消滅した地名をも加え

るならば、95郡のうち、じつに90郡(94.7%)までが、なんらかの形で残っている。千年の流れにさからって、約95%の郡名は、なんらかの形で残っているのである。

言語学の分野で、地名は、「言語の化石」といわれる。ふつうのことばにくらべ、地名は、ずっと歳月による風化をうけにくい。

### 九州と近畿の地名の一致のナゾ

「安川」によって、第1のふしぎな扉がひらかれ、「香山」によって、第2のふしぎの扉がひらかれた。そしてさらに、私たちは、第3のふしぎな扉のまえにたっている。それは、「九州と近畿との地名の一致」というふしぎな扉である。

地名学者、鏡味完二は、著書『日本の地名』(角川書店)のなかで、およそつぎのようなことを指摘している。

――九州と近畿のあいだで、地名の名づけかたが、じつによく一致している。11組の似た地名をとりだすことができるが、これらの地名はいずれも、

- (1) ヤマトを中心としている。
- (2) 海のほうへ、怡土<sup>いと</sup>→志摩(九州)、伊勢→志摩(近畿)となっている。
- (3) 山のほうへ、耳納<sup>みのう</sup>→日田<sup>ひた</sup>→熊<sup>くま</sup>(九州)、美濃→飛騨→熊野(近畿)となっている。

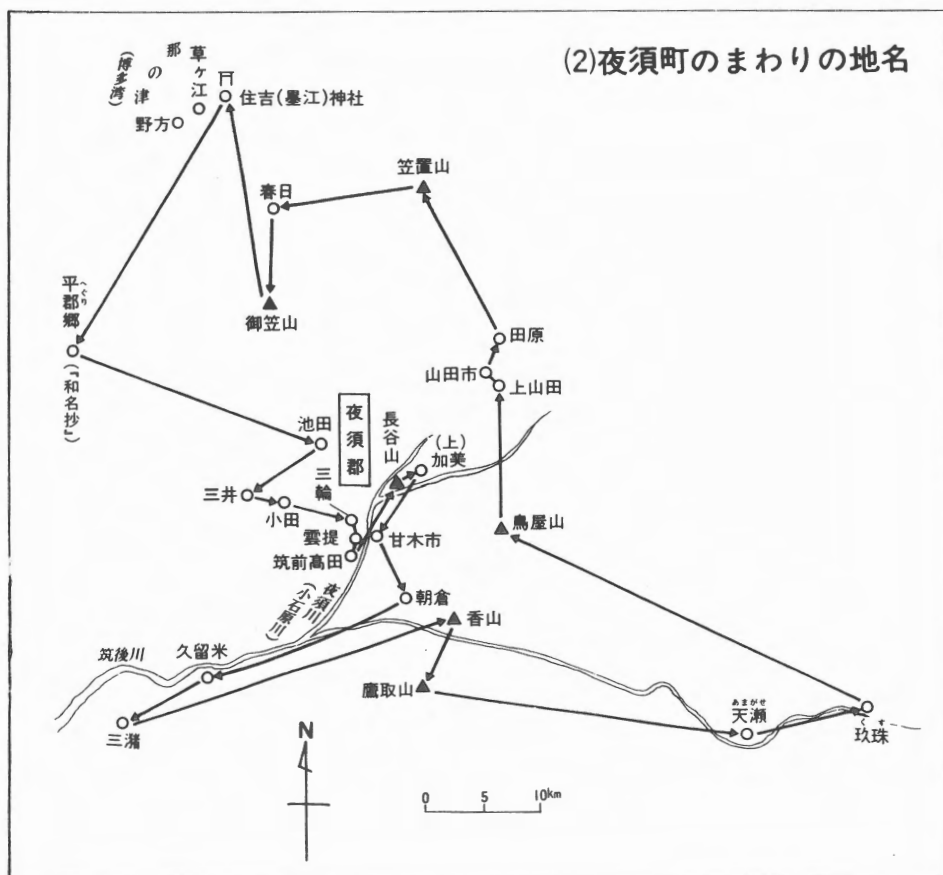
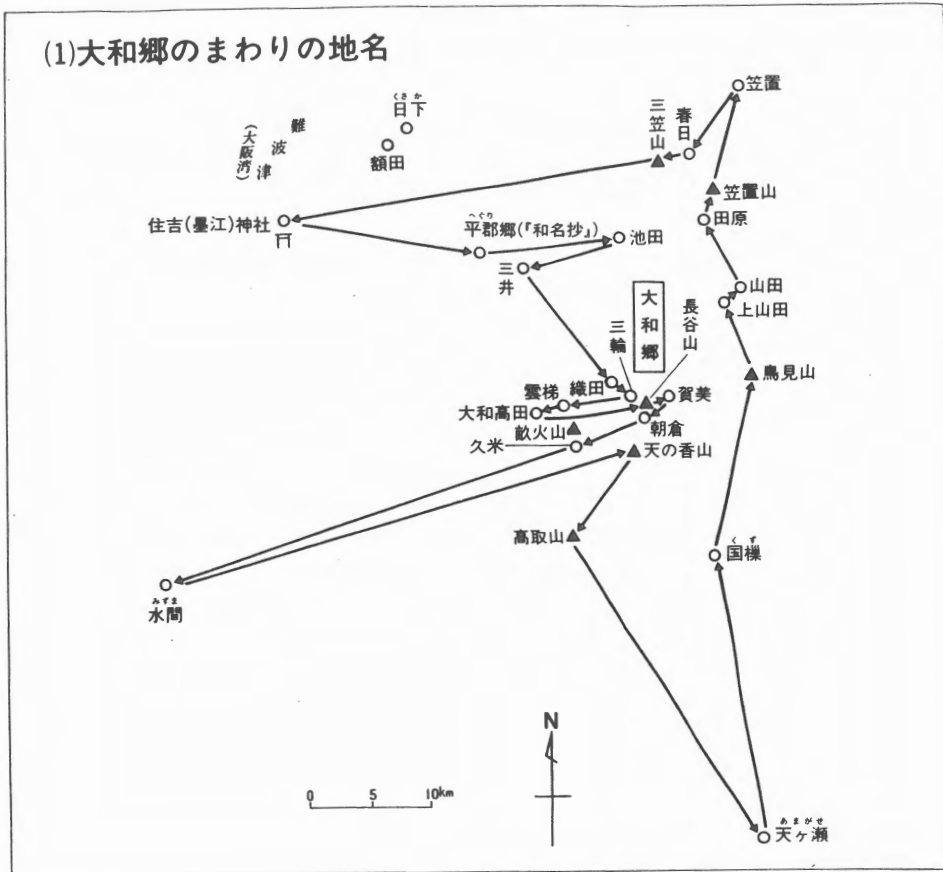
これらの対の地名は、位置や地形までがだいたい一致している。

たとえば、金印のでたことでよく知られる北九州の志賀島の志賀と、近畿の滋賀とでは、どちらも、音が「シガ」で笠置山、三笠山の北にあり、水の近くにある。すなわち、志賀島は、博多湾にあり、近畿の滋賀は、琵琶湖の近くにある。

鏡味完二の指摘は、ひじょうに興味のあるものである。北九州と奈良県との地図をひらいて、もっとくわしくみてみよう。すると、私たちはつぎのようなことに気がつく。それは、すでに述べた北九州の夜須町と、大和の国大和郷に、おどろくほどの地名の一致をみいだすことである。(図3参照)

### ■北九州

図3 北九州の地名と大和の地名とのふしぎな一致



(北の笠置山からはじまって、時計の針の方向と逆に一周すれば) 笠置山  
 →春日→御笠山→住吉(墨江)神社→平郡→池田→三井→小田→三輪→雲堤  
 →筑前高田→長谷山→加美(上)→朝倉→久留米→三瀨→香山(高山)→  
 鷹取山→天ヶ瀬→玖珠→鳥屋山→上山田→山田市→田原→笠置山。

#### ■畿内

(北の笠置「笠置山」からはじまって、同じく時計の針の方向と逆に  
 一周すれば) 笠置(笠置山)  
 →春日→三笠山→住吉(墨江)神社→平郡→池田→三井→織田→三輪→雲梯  
 →大和高田→長谷山→加美(上)→朝倉→久米→水間→天の香山(高山)→  
 高取山→天ヶ瀬→国樺→鳥見山→上山田→山田→田原→笠置山。

どちらにも、北方に、笠置山が存在する。三笠山、あるいは御笠山が存在する。住吉(墨江)神社が存在する。

西南方に、三瀨、あるいは水間が存在し、南方から東南方にかけて、鷹取山(高取山)、天ヶ瀬(天ヶ瀬)、玖珠(国樺)が存在する。

これら24個の地名は、発音がほとんど一致している。24個の土地の相対的位置も、だいたいおなじである。おどろくほどの一致といってよいであろう。

住吉神社の近くには、草ヶ江(日下)、野方(額田)などの、類似地名が存在する。相対的な位置を無視すれば、以上のほかに、奈良、出雲、八幡、芦屋、大津、怡土(または伊都)、那珂(または名賀、那賀)、曾我(蘇我)、広瀬などの地名が、九州と関西の双方にある。

また、朝倉のあたりに、類似の地名が集中している。鏡味完二は、著書『日本地名学・科学編』(日本地名学研究所)で、「民団が移住する場合には、その地名をもって選ばれた。・・・日本の地名には割合に同種の古代地名が多く、その多い原因が偶然ではなく、必然に歴史的に順序があつて持ち運ばれて来た結果となったものと解せられる。」という折口信夫博士の見解を引用し、つぎのようにのべている。

「著者はここで、上代の二大文化地域であった、北九州と近畿との間に、地名の相通ずるものが、著しく目立って存在する事実を指摘し、伝うる所の神武天皇御東征の暗示する、民団の大きい移動に、その基因をもとめようとする。」

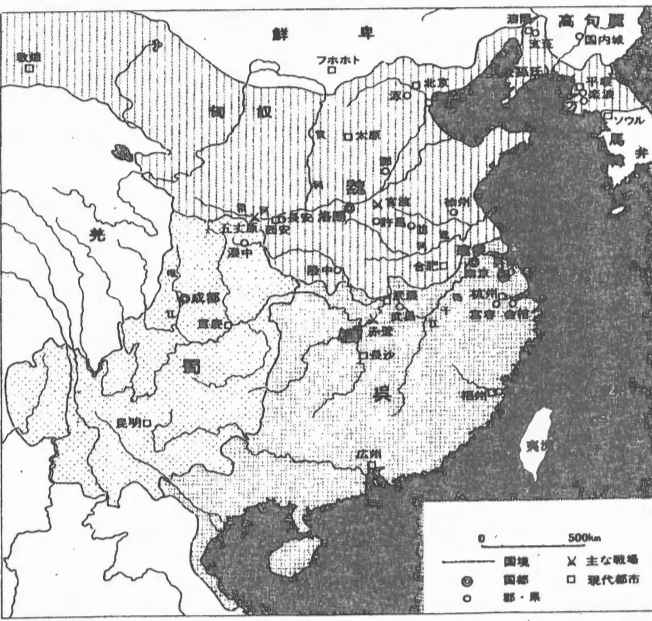
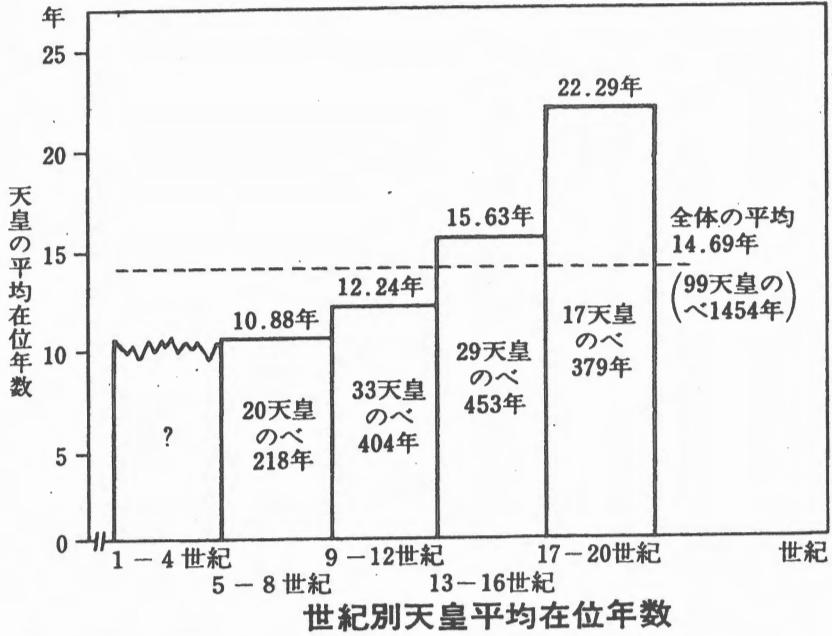
地名についてのこのような事実も、邪馬台国東遷説を支持するものである。

朝倉平野の中心部、甘木市、夜須町の近くには、高天の原神話の伝える「安川（夜須川）」「香山」の地名が、セットの形で存在することも考えあわせるならば、高天の原、すなわち、邪馬台国は、この地域に存在したものと考えられる。

甘木市からは、1992年に、大環濠集落・平塚川添遺跡が出現している。平塚川添遺跡は、全体的には、「吉野ヶ里よりも大きな集落群」といわれている。

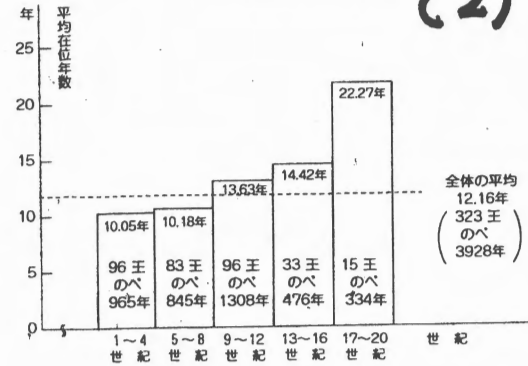
また、最近、西暦247年、248年の2年つづけて、北九州の上を皆既日食が通りすぎていることがわかった。247年、248年といえば、卑弥呼が死んだとみられる年の前後である。日本神話の伝える「天照大御神が天の岩戸に隠れた」という伝承は、卑弥呼の死と皆既日食が重なったために生じた可能性がある。

# (1)

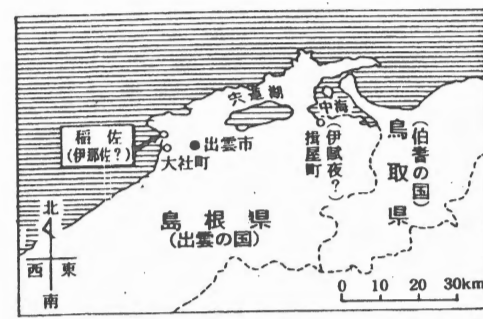
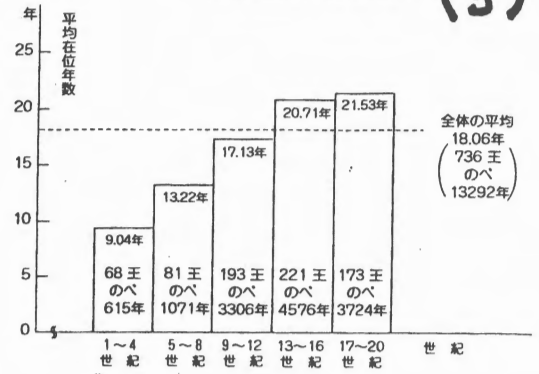


三国時代の東アジア

# (2) 中国の王の平均在位年数

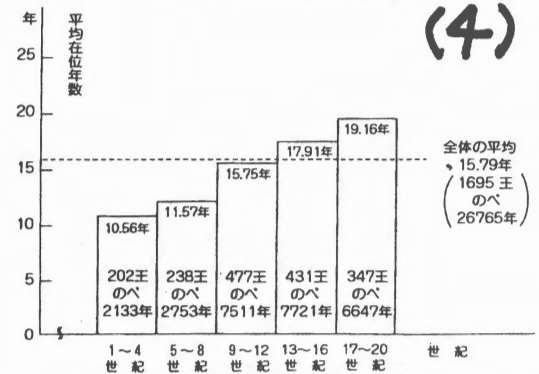


# (3) 西洋の王の平均在位年数

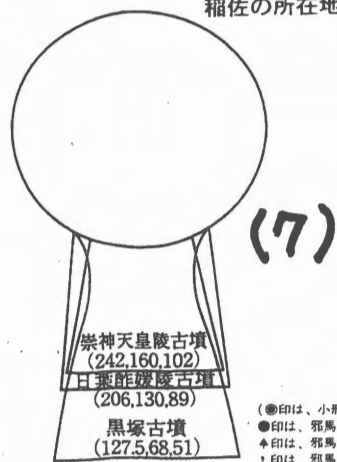


福佐の所在地

# (4) 世界の王の平均在位年数



# (6)



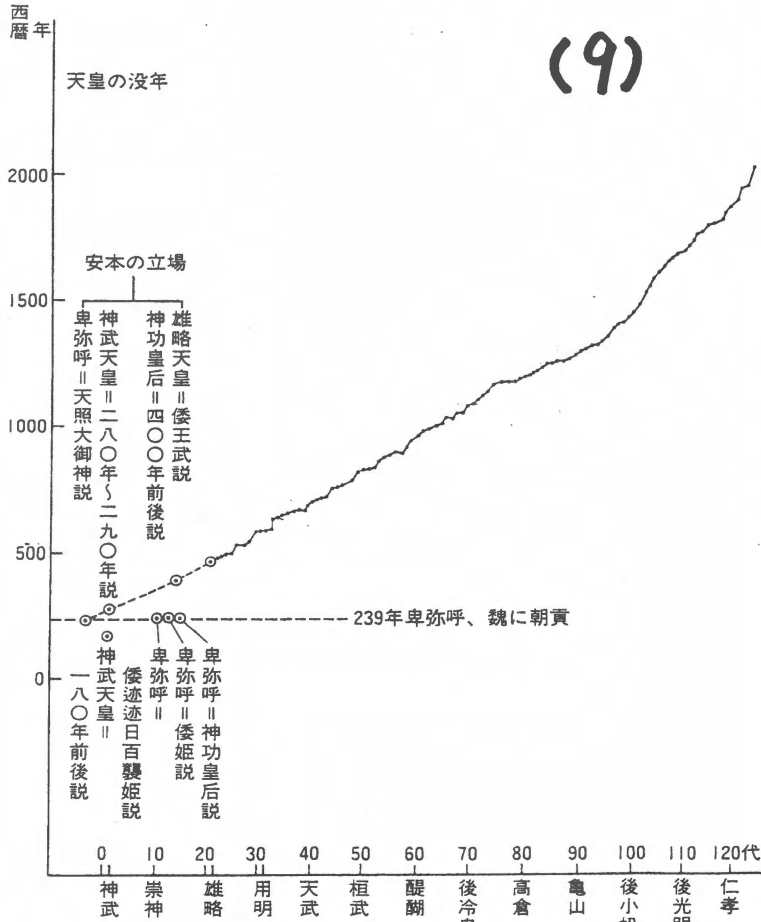
黒塚古墳は、崇神天皇陵よりも前方部が発達している  
 (カッコ内の数字は、[墳丘全長、後円部直径、前方部幅])

# (8)

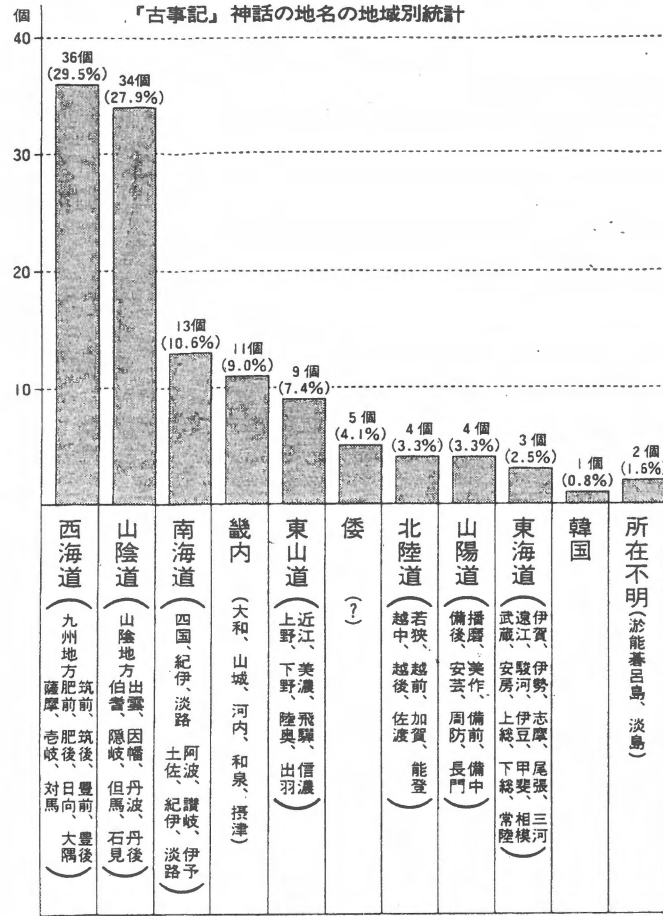


邪馬台国時代の遺物の出土状況

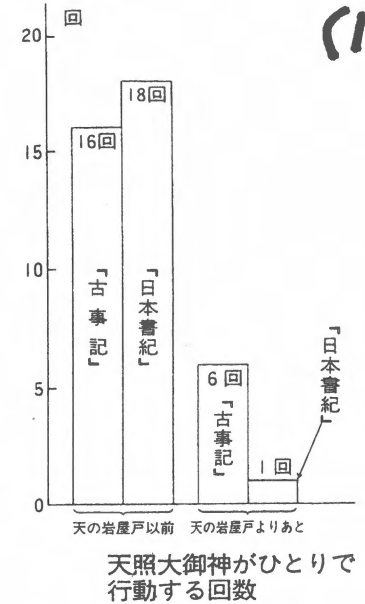
(10)



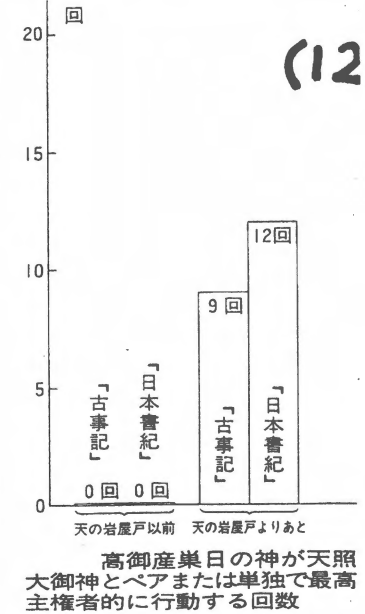
(9)



(11)



(12)



天皇の代と没年

(13)

「日本書紀」における最高主権者の存在の変化

	天の岩屋戸以前	天の岩屋戸よりあと	計
天照大御神がひとりで行動	18	1	19
高御産巢日の神だけが最高主権者の的に行動	0	12	12
計	18	13	31

\*テキストは、日本古典文学大系「日本書紀」上巻(岩波書店刊)による。  
\*天照大御神と高御産巢日の神が、ペアで行動している例はない。  
\*天照大御神をさしていることがあきらかなばあいは、「日の神」「大日靈の貴」「節」などをふくむ。  
\*分枝のなかに登場しているものをふくまない。

(14)

「古事記」における最高主権者の存在の変化

	天の岩屋戸以前	天の岩屋戸よりあと	計
天照大御神がひとりで行動	16	6	22
高御産巢日の神とペアで行動	0	7	7
高御産巢日の神だけが最高主権者の的に行動	0	2	2
計	16	15	31

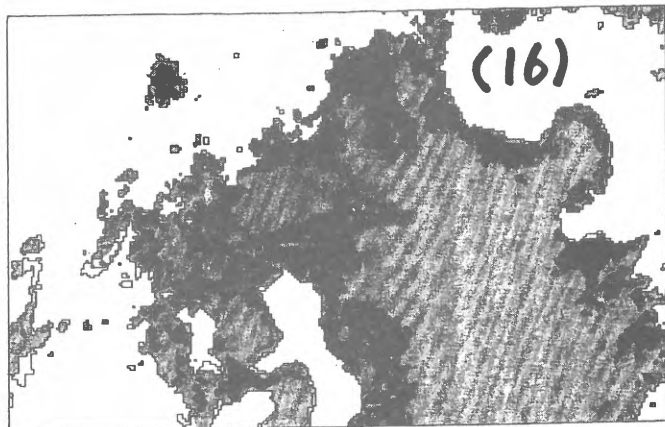
\*テキストは、日本古典文学大系「古事記 祝詞」(岩波書店刊)による。



(15)



九州北半部の平野分布

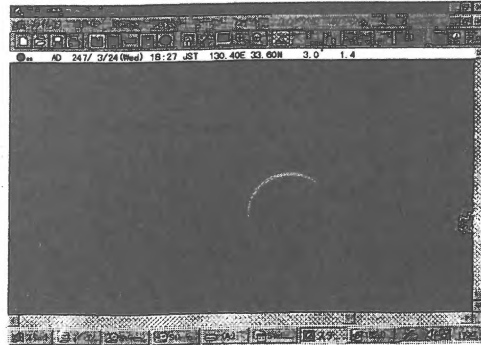


Above 20 15~20 10~15 5~10 0~5 Below 0

弥生時代遺跡の推定分布(及川昭文氏による)



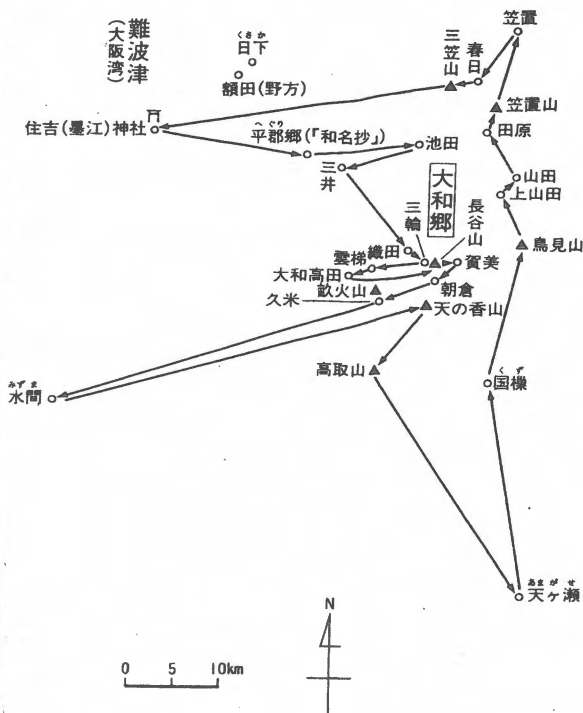
247年3月24日18時26分(福岡)



247年3月24日18時27分(福岡)

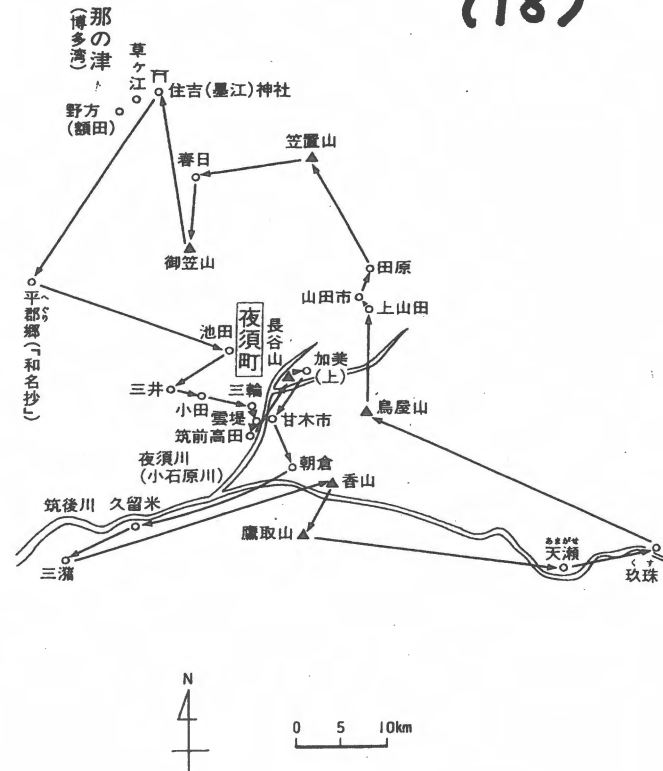
(17)

(1)大和郷のまわりの地名



北九州の地名と大和の地名とのふしぎな一致

(2)夜須町のまわりの地名



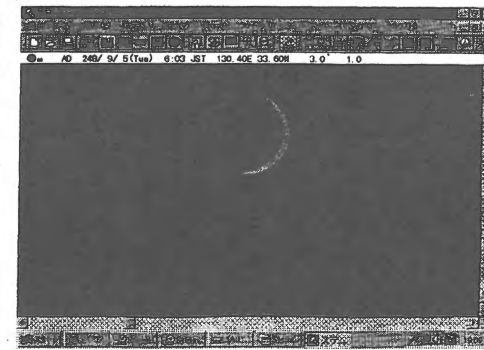
(19)

西暦 247年、248年の日食

写真は、株式会社アスキー社のパソコンソフト「ステラナビゲータ」を用い、日食の状況をコンピュータ画面に表示させたもの。



248年9月5日6時2分(福岡)

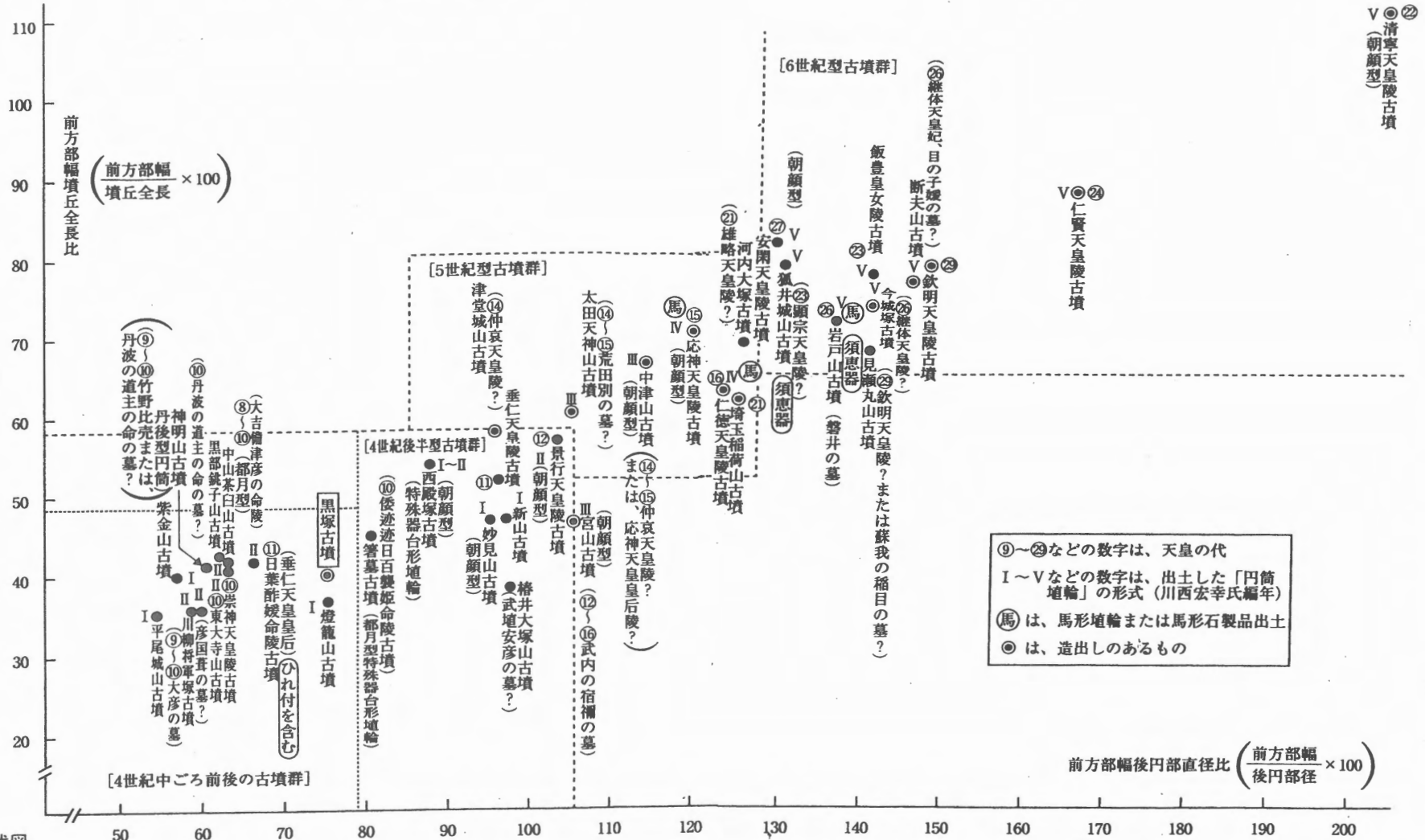


248年9月5日6時3分(福岡)



前方後円墳の築造年代推定図

(20)



V◎⑳ 清寧天皇陵古墳 (朝顔型)

諸天皇の推定年代図

(21)

西暦年	610	600	590	580	570	560	550	540	530	520	510	500	490	480	470	460	450	440	430	420	410	400	390	380	370	360	350	340	330	320	310	300	290	280年	代		
33	32	31	30	29				28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
	推古	崇峻	敏達	欽明				宣化	繼體		武烈	仁賢	顯宗	清寧	雄略	安祿	允恭	反正	履中	仁德	応神		神功皇后・仲哀	成務	景行	垂仁	崇神	開化	孝元	孝靈	孝安	孝昭	懿德	安寧	綏靖	神武	
	(593)	(588)	(586)	(572)				(540)	(536)	(534)		(507)	(499)	(488)	(485)	(480)																					

(『日本書紀』の各天皇の元年)

# (22)

## 同型鏡の面径の一致率

同型鏡 番号	鏡式名(同鏡型 による分類)	新 鑄 ( 面 径 小 ) ← 出 土 古 墳 → 古 鑄 ( 面 径 大 )	同じ古墳で 一致するか	異 な る 古 墳 の 一 致 率
16	陳是作四神二獸鏡	兵庫・権現山51号(21・9) 岡山・湯迫車塚〔2〕(22・0)(22・0) 京都・椿井大塚山(22・0) 神奈川・真土大塚山(22・1)	○	$\frac{2}{9} = \frac{2}{4+2+2+1}$
26	吾作三神五獸鏡	兵庫・権現山51号(21・45) 京都・椿井大塚山〔2〕(21・5)(21・5) 愛知・百々町(伝)(21・5)	○	$\frac{2}{5} = \frac{2}{3+1+1}$
31	吾作二神六獸鏡	福岡・大日〔2〕(22・0)(22・0) 岡山・湯迫車塚(22・2)	○	$\frac{0}{2} = \frac{0}{0}$
35	吾作四神四獸鏡	兵庫・西求女塚(19・8) 京都・椿井大塚山〔2〕(19・8)(19・8) 福岡・石塚山(20・0) 広島・中小田1号(20・1) 大阪・万年山(20・1)	○	$\frac{3}{14} = \frac{2+1}{5+3+3+3+1}$
42	櫛歯文帯四神四獸鏡	京都・椿井大塚山〔2〕(22・1)(22・1) 奈良・円照寺裏山(22・2)	○	$\frac{0}{2} = \frac{0}{2}$
44	天王日月 ・唐草文帯四神四獸鏡	兵庫・吉島〔2〕(23・4)(23・4) 京都・椿井大塚山(23・7) 静岡・赤門上(23・7) 個人蔵(23・7) 奈良・佐味田宝塚(23・9) 滋賀・雪野山(不明)	○	$\frac{1}{14} = \frac{1}{4+4+3+2+1}$
46	天王日月 ・獸文帯四神四獸鏡	福岡・神蔵(22・3) 山口・竹島御家老屋敷(22・3) 京都・椿井大塚山〔3〕(22・3)(22・3)(22・3) 神奈川・白山(22・4)	○○○	$\frac{7}{12} = \frac{4+3}{5+4+1+1+1}$
93	天・王・日・月 ・唐草文帯二神二獸鏡	兵庫・へボソ塚(21・4) 京都・長法寺南原〔2〕(21・5)(21・5) 愛知・東之宮(21・5) 京都・西車塚(21・7) 岐阜・円満寺山(21・7) 岐阜・長塚〔東棺〕(21・7) 大阪・石切神社(伝)(21・9) 奈良・佐味田宝塚(不明)	○	$\frac{5}{27} = \frac{2+2+1}{7+5+5+4+3+2}$
105	天王日月 ・獸文帯三神三獸鏡	福岡・石塚山〔2〕(22・4)(22・4) 京都・椿井大塚山(22・5) 福岡・原口(22・6) 福岡・天神森(22・6) 大分・赤塚(22・6)	○	$\frac{3}{14} = \frac{2+1}{4+4+3+2+1}$
204	獸文帯三神三獸鏡	大阪・壺井御旅山(24・0) 京都・百々ヶ池(24・2) 福岡・沖ノ島17号遺跡(24・3) 大阪・紫金山〔2〕(24・4)(24・4)	○	$\frac{0}{10} = \frac{0}{4+3+2+1}$
206	獸文帯三神三獸鏡	山口・長光寺山(21・3) 兵庫・親王塚(21・5) 大阪・〔2〕(21・6)(21・7) 奈良・新山(21・7)	×	$\frac{2}{9} = \frac{1+1}{4+3+1+1}$
207	獸文帯三神三獸鏡	岐阜・野中〔南石室〕(21・3) 山口・長光寺山〔2〕(21・6)(21・6) 岡山・鶴山丸山(伝)(21・6) 滋賀・亀塚 (21・6) 三重(伝)(21・6)	○	$\frac{9}{14} = \frac{3+3+2+1}{5+3+3+2+1}$
208	獸文帯三神三獸鏡	福岡・一貴山饒子塚〔2〕(22・0)(22・0) 兵庫・南大塚(不明)	○	$\frac{0}{0}$
209	獸文帯三神三獸鏡	福岡・一貴山饒子塚〔2〕(22・0)(22・0)	○	$\frac{0}{0}$
213	獸文帯三神三獸鏡	愛知・出川大塚〔2〕(22・1)(22・1) 黒川古文化研究所〔2〕(22・1)(22・1) 奈良・観音寺町(22・2) 鳥取・大将塚(22・3) 京都・稲荷山(22・3) 大阪・矢作神社境内(伝)(不明) 奈良・高市郡(伝)(不明)	○○	$\frac{5}{19} = \frac{2+2+1}{5+5+3+3+2}$
233	吾作三神三獸鏡	佐賀・谷口〔東石室〕(21・0) 福岡・一貴山饒子塚〔2〕(21・2)(21・2) 大阪・ヌク谷北塚〔2〕(21・2)(21・2)	○○	$\frac{4}{8} = \frac{2+2}{4+2+2}$
234	獸文帯三神三獸鏡	佐賀・谷口〔西石室〕(21・6)(21・6) 出土地不明(21・7) 大阪・阿武山(21・8) 滋賀・天王山(21・8) 愛知・小本天王山(不明)	○	$\frac{1}{9} = \frac{1}{3+3+2+1}$
			$\frac{20}{21} = 0.95$	$\frac{44}{168} = 0.26$

(23)

「古い鏡」と「新しい鏡」(踏み返し鏡による)

三角縁神獸鏡 同型鏡番号	古い鏡の出土古墳と面径 (面径の大きい鏡)	新しい鏡の出土古墳と面径 (面径の小さい鏡)	註 面径差・その他
①画像文帯盤竜鏡	岡山・湯迫車塚古墳 25.0cm	群馬県・北山茶臼山古墳 24.3cm 滋賀県・大岩山古墳 24.5cm	0.7cm (2回以上の 踏み返し) 0.5cm
②波文帯盤竜鏡	兵庫県・吉島古墳 22.3cm	群馬県・頼母子古墳 21.7cm	0.6cm
③波文帯盤竜鏡	奈良県・黒塚古墳 25cm	愛知県・奥津社(伝) 24.4cm 京都府・椿井大塚山古墳 24.5cm 大阪府・黄金塚古墳 24.5cm	0.6cm 0.5cm 0.5cm
⑨天王日月・獸文帯 同向式神獸鏡	京都府・椿井大塚山古墳 23.4cm 岡山県・湯迫車塚古墳 23.4cm	静岡県・上平川大塚古墳 22.9cm	0.5cm 0.5cm
⑬陳氏作神獸車馬 鏡	琵琶湖文化館蔵 22.5cm 福岡県・藤崎第6号方形 周溝墓 22.3cm	群馬県・三本木(伝) 21.9cm 山梨県・銚子塚古墳 22.1cm	0.6cm 0.4cm 0.4cm
⑮新作徐州銘四神 四獸鏡	奈良県・黒塚古墳 23.5cm	滋賀県・織部山古墳 23.1cm	0.4cm
⑯吾作三神五獸鏡	岐阜県・旧可兒町 22.6cm	千葉県・城山1号古墳 22.2cm	0.4cm
⑳吾作四神四獸鏡 (環状乳式)	奈良県・富雄丸山1号墳(伝) 21.7cm	五島美術館蔵 20.8cm	0.9cm
㉑吾作四神四獸鏡	京都府・椿井大塚山古墳 22.6cm	奈良県・新山古墳 22.1cm	0.5cm
㉒吾作三神四獸鏡	兵庫県・水堂古墳 23.0cm	京都府・芝ヶ原11号墳 22.1cm	0.9cm
㉔天王日月唐草文 帯四神四獸鏡	奈良県・佐味田宝塚古墳 23.9cm 個人蔵 23.8cm	兵庫県・吉島古墳 23.4cm 兵庫県・吉島古墳 23.4cm	0.5cm 0.4cm 0.5cm 0.4cm
㉕天王日月獸文帯 四神四獸鏡	鳥取県・旧社村付近(伝) 22.1cm	宮崎県・持田48号墳 21.4cm 群馬県・天神山古墳 21.9cm	0.7cm 0.4cm

(24)

県名	古い鏡
奈良県	6面
大阪府	5
福岡県	4
兵庫県	4
京都府	2
岡山県	2
鳥取県	1
島根県	1
愛知県	1
岐阜県	1
千葉県	1
その他	3
計	31

(26)

諸古墳などの出土鏡の「新鑄度指数」と「古鑄度指数」

古墳名	新鑄度指数	古鑄度指数
(群馬県蟹沢古墳)	100.0%(5/5)	0.0%
(静岡県連福寺古墳)	100.0%(6/6)	0.0%
(岐阜県野中古墳南石室)	100.0%(8/8)	0.0%
佐賀県谷口古墳	92.3%(12/13)	7.7%
群馬県出土鏡	82.6%(19/23)	17.4%
兵庫県吉島古墳	72.7%(8/11)	27.3%
愛知県東之宮古墳	72.7%(8/11)	27.3%
福岡県石塚山古墳	70.6%(12/17)	29.4%
群馬県三本木(伝)	70.0%(7/10)	30.0%
京都府長法寺南原古墳	66.7%(10/15)	33.3%
静岡県出土鏡	57.1%(12/21)	42.9%
兵庫県権現山51号墳	57.1%(8/14)	42.9%
福永伸哉氏の説く三角縁 神獸鏡A・B段階鏡のみ出 土した古墳全体	53.6%(37/69)	46.4%
奈良県新山古墳	46.2%(6/13)	53.8%
「長宜子孫」銘内行花文鏡 の出土した古墳	43.5%(50/115)	56.5%
兵庫県西求女塚古墳	41.7%(5/12)	58.3%
山口県長光寺山古墳	38.9%(7/18)	61.1%
岐阜県円満寺山古墳	38.5%(5/13)	61.5%
(京都府百々ヶ池古墳)	37.5%(3/8)	62.5%
福岡県出土鏡	37.1%(23/62)	62.9%
京都府椿井大塚山古墳	36.8%(25/68)	63.2%
大阪府万年山古墳	33.3%(4/12)	66.7%
大阪府紫金山古墳	18.5%(5/27)	81.5%
岐阜県百合ヶ池古墳	18.2%(2/11)	81.8%
岡山県湯迫車塚古墳	15.4%(4/26)	84.6%
奈良県佐味田宝塚古墳	10.5%(2/19)	89.5%
大分県赤塚古墳	9.1%(1/11)	90.9%
(大分県免ヶ平古墳)	0.0%(0/8)	100.0%
(福岡県一貴山銚子塚古墳)	0.0%(0/8)	100.0%

「古い鏡」の出土した県

(25)

「新しい鏡」の出土した県

県名	新しい鏡
兵庫県	5面
京都府	5
群馬県	4
奈良県	3
滋賀県	3
愛知県	3
大阪府	2
岐阜県	1
静岡県	1
山梨県	1
千葉県	1
島根県	1
鳥取県	1
岡山県	1
愛媛県	1
大分県	1
熊本県	1
宮崎県	1
その他	1
計	37

古墳名をカッコでかこんだものは、指数算出のための分母が10未満で、数値の信頼度がややひくいもの。各府県の「新鑄度指数」の算出にあたっては、同じ県から出土した同型鏡は、比較の対象にふくめていない。



(28)

新しい形式の「4世紀型古墳」出土鏡の「新鑄度指数」

No.	古墳名	同型鏡番号	新鑄度指数	累積新鑄度指数
(1)	京都府南原古墳	㉗㉘㉙	66.7%(10/15)	66.7%(10/15)
(2)	京都府妙見山古墳	㉚	33.3%(1/3)	61.6%(11/18)
(3)	山梨県甲斐鏡子塚古墳	㉛㉜	75.0%(3/4)	63.6%(14/22)
(4)	静岡県午王動山3号墳	㉝	100.0%(1/1)	65.2%(15/23)
(5)	奈良県佐味田宝塚古墳	㉞㉟㊱㊲㊳	10.5%(2/19)	40.5%(17/42)
(6)	山口県長光寺山古墳	㊴㊵	38.9%(7/18)	40.0%(24/60)
(7)	京都府垣内古墳	㊶㊷㊸	33.3%(1/3)	39.7%(25/63)
(8)	佐賀県谷口古墳	㊹㊺㊻	92.3%(12/13)	48.7%(37/76)
(9)	千葉県手古塚古墳	㊼	25.0%(1/4)	47.5%(38/80)
(10)	愛媛県相の谷1号墳	記載なし	—	—
(11)	滋賀県天王山古墳	㊽	0.0%(0/4)	45.2%(38/84)
(12)	長野県森將軍塚古墳	㊾	—	—
(13)	岡山県花光寺山古墳	㊿	100.0%(3/3)	47.1%(41/87)
(14)	福岡県石塚山古墳	㊿㊿㊿㊿㊿	70.6%(12/17)	5.1%(53/104)
(15)	神奈川県白山古墳	㊿	0.0%(0/5)	48.6%(53/109)
(16)	兵庫県吉島松山古墳	㊿㊿㊿㊿	72.7%(8/11)	50.8%(61/120)
(17)	群馬県前橋天神山古墳	㊿㊿	50.0%(1/2)	50.8%(62/122)
(18)	京都府椿井大塚山古墳	表16参照	36.8%(25/68)	45.8%(87/190)
(19)	愛知県東之宮古墳	㊿㊿㊿㊿㊿	72.7%(8/11)	47.3%(95/201)
(20)	京都府寺戸大塚古墳	㊿㊿	100.0%(3/3)	48.0%(98/204)
(21)	岡山県備前(湯迫)車塚古墳	表16参照	15.4%(4/26)	50.2%(102/230)
(22)	奈良県新山古墳	㊿㊿㊿㊿㊿	46.2%(6/13)	44.4%(108/243)
(23)	奈良県宮山古墳	㊿	—(0/0)	44.4%(108/243)
(24)	京都西車塚古墳	㊿	14.3%(1/7)	43.6%(109/250)
(25)	京都府久津川車塚古墳	㊿㊿	100.0%(4/4)	44.5%(113/254)

表20の最終的な累積新鑄度指数12.7%(10/79)と、表21の最終的な累積新鑄度指数44.5%(113/254)とのあいだには、統計学的に、偶然とはいえなにかいがかみとめられる。カイ自乗検定によれば、1%水準で有意の差がみられる。

(29)

古い形式の「4世紀型古墳」出土鏡の「新鑄度指数」

No.	古墳名	同型鏡番号	新鑄度指数	累積新鑄度指数
(1)	山梨県大丸山古墳	㊿	0.0%(0/2)	0.0%(0/2)
(2)	福岡県神蔵古墳	㊿	20.0%(1/5)	14.3%(1/7)
(3)	静岡県寺谷鏡子塚古墳	㊿	0.0%(0/2)	11.1%(1/9)
(4)	静岡県赤門上古墳	㊿	40.0%(2/5)	21.4%(3/14)
(5)	静岡県松林山古墳	㊿	—(0/0)	21.4%(3/14)
(6)	大阪府真名井古墳	㊿	0.0%(0/3)	17.6%(3/17)
(7)	福岡県妙法寺2号墳	㊿	100.0%(1/1)	22.2%(4/18)
(8)	福岡県一貴山鏡子塚古墳	㊿㊿㊿㊿㊿	0.0%(0/8)	15.4%(4/26)
(9)	福島県会津大塚山古墳	㊿	0.0%(0/1)	14.8%(4/27)
(10)	佐賀県空路寺古墳	㊿	0.0%(0/1)	14.3%(4/28)
(11)	大分県免ヶ平古墳	㊿	0.0%(0/8)	11.1%(4/36)
(12)	奈良県桜井茶白山古墳	㊿㊿㊿㊿㊿	測定値(—) 無記入	11.1%(4/36)
(13)	京都府平尾城山古墳	—	—	11.1%(4/36)
(14)	大阪府紫金山古墳	㊿㊿㊿㊿㊿	18.5%(5/27)	14.3%(9/63)
(15)	大分県赤塚古墳	㊿㊿㊿㊿㊿	9.1%(1/11)	13.5%(10/74)
(16)	鳥取県馬山4号墳	㊿	—(0/0)	13.5%(10/74)
(17)	大阪府和泉黄金塚古墳	㊿	0.0%(0/2)	13.2%(10/76)
(18)	愛知県宇都宮古墳	㊿	0.0%(0/3)	12.7%(10/79)
(19)	奈良県メスリ山古墳	㊿	—(—)	12.7%(10/79)

- 80. 天王日月・鋸齒文帯四神 大分・赤塚(23.0) 京都・長法寺南原(23.0) 京都・椿井大塚山(23.2) 奈良・桜井茶白山(不明)
- 93. 天・王・日・月・唐草文帯 兵庫・ヘボソ塚(21.4) 京都・長法寺南原[2](21.5)(21.5) 二神二獸鏡 愛知・東之宮(21.5) 京都・西車塚(21.7) 岐阜・円満寺山(21.7) 岐阜・長塚(東館)(21.7) 大阪・石切神社(伝)(21.9) 奈良・佐味田宝塚(不明)
- 103. 君・宜・高・官・獸文帯三 京都・長法寺南原(22.7) 奈良・白石(伝)(22.8) 神三獸鏡



(30)

三角縁神獸鏡の「形式」別「新鑄度指数」

鏡名	新鑄度指数	古鑄度指数
「正始元年」銘鏡	54.5%(6/11)	45.5%
福永伸哉氏の説く三角縁神獸鏡 A・B段階鏡のみ出土した古墳全体	53.6%(37/69)	46.4%
三角縁仏獸鏡	52.4%(11/21)	47.6%
波文帯盤竜鏡	37.1%(36/97)	62.9%
獸文帯三神三獸鏡	36.1%(30/83)	63.9%
同向式鏡(『正始元年銘』鏡を除く)	35.6%(37/104)	64.4%
天王日月獸文帯四神四獸鏡	34.7%(41/118)	65.3%
波文帯三神三獸鏡	33.3%(16/48)	66.7%
天王日月三神三獸鏡	32.9%(27/82)	67.1%
「君宜・長宜」三神三獸鏡	32.6%(14/43)	67.4%
徐州銘鏡	32.3%(31/96)	67.7%
画文帯五神四獸鏡	32.2%(29/90)	67.8%
天王日月唐草文帯四神四獸鏡	31.4%(27/86)	68.6%
画像文帯盤竜鏡	27.6%(8/29)	72.4%
「長宜子孫」獸文帯三神三獸鏡	23.5%(8/34)	76.5%
陳氏作神獸車馬鏡	18.0%(9/50)	82.0%
博山炉鏡	17.4%(4/23)	82.6%
福永伸哉氏のいう仿製三角縁神獸 I-aの鏡	17.4%(8/46)	82.5%
新作徐州四神四獸鏡	16.7%(7/42)	83.3%

(31)

古い形式の「4世紀型古墳(A群の古墳)」から出土した「いわゆる仿製鏡」と「いわゆる舶載鏡」の面数

No.	古墳名	同型鏡番号	いわゆる仿製鏡	いわゆる舶載鏡
(1)	山梨県大丸山古墳	⑩	0面	1面
(2)	福岡県神蔵古墳	④⑤	0	1
(3)	静岡県寺谷銚子塚古墳	⑩	0	1
(4)	静岡県赤門上古墳	④②	0	1
(5)	静岡県松林山古墳	⑩	0	1
(6)	大阪府真名井古墳	⑩	0	1
(7)	福岡県妙法寺2号墳	⑤③	0	1
(8)	福岡県一貴山銚子塚古墳	②③ ②④ ②⑤ ②⑥ ②⑦ ②⑧ ②⑨ ②⑩ ②⑪ ②⑫ ②⑬ ②⑭ ②⑮ ②⑯ ②⑰ ②⑱ ②⑲ ②⑳ ②㉑ ②㉒ ②㉓ ②㉔ ②㉕ ②㉖ ②㉗ ②㉘ ②㉙ ②㉚ ②㉛ ②㉜ ②㉝ ②㉞ ②㉟ ②㊱ ②㊲ ②㊳ ②㊴ ②㊵ ②㊶ ②㊷ ②㊸ ②㊹ ②㊺ ②㊻ ②㊼ ②㊽ ②㊾ ②㊿	8	0
(9)	福島県会津大塚山古墳	②③	1	0
(10)	佐賀県志路寺古墳	②⑦	1	0
(11)	大分県免ヶ平古墳	②⑧	1	0
(12)	奈良県桜井茶白山古墳	⑤⑤ ⑤⑦ ⑤⑧ ⑤⑨ ⑤⑩ ⑤⑪ ⑤⑫ ⑤⑬ ⑤⑭ ⑤⑮ ⑤⑯ ⑤⑰ ⑤⑱ ⑤⑲ ⑤⑳ ⑤㉑ ⑤㉒ ⑤㉓ ⑤㉔ ⑤㉕ ⑤㉖ ⑤㉗ ⑤㉘ ⑤㉙ ⑤㉚ ⑤㉛ ⑤㉜ ⑤㉝ ⑤㉞ ⑤㉟ ⑤㊱ ⑤㊲ ⑤㊳ ⑤㊴ ⑤㊵ ⑤㊶ ⑤㊷ ⑤㊸ ⑤㊹ ⑤㊺ ⑤㊻ ⑤㊼ ⑤㊽ ⑤㊾ ⑤㊿	0	10
(13)	京都府平尾城山古墳	—	1	0
(14)	大阪府紫金山古墳	⑩② ⑩③ ⑩④ ⑩⑤ ⑩⑥ ⑩⑦ ⑩⑧ ⑩⑨ ⑩⑩ ⑩⑪ ⑩⑫ ⑩⑬ ⑩⑭ ⑩⑮ ⑩⑯ ⑩⑰ ⑩⑱ ⑩⑲ ⑩⑳ ⑩㉑ ⑩㉒ ⑩㉓ ⑩㉔ ⑩㉕ ⑩㉖ ⑩㉗ ⑩㉘ ⑩㉙ ⑩㉚ ⑩㉛ ⑩㉜ ⑩㉝ ⑩㉞ ⑩㉟ ⑩㊱ ⑩㊲ ⑩㊳ ⑩㊴ ⑩㊵ ⑩㊶ ⑩㊷ ⑩㊸ ⑩㊹ ⑩㊺ ⑩㊻ ⑩㊼ ⑩㊽ ⑩㊾ ⑩㊿	9	1
(15)	大分県赤塚古墳	④ ⑤⑩ ④⑩ ④⑪ ④⑫ ④⑬ ④⑭ ④⑮ ④⑯ ④⑰ ④⑱ ④⑲ ④⑳ ④㉑ ④㉒ ④㉓ ④㉔ ④㉕ ④㉖ ④㉗ ④㉘ ④㉙ ④㉚ ④㉛ ④㉜ ④㉝ ④㉞ ④㉟ ④㊱ ④㊲ ④㊳ ④㊴ ④㊵ ④㊶ ④㊷ ④㊸ ④㊹ ④㊺ ④㊻ ④㊼ ④㊽ ④㊾ ④㊿	0	5
(16)	鳥取県馬山4号墳	⑬	0	1
(17)	大阪府和泉黄金塚古墳	③	0	1
(18)	愛知県宇都宮古墳	②⑤	1	0
(19)	奈良県メスリ山古墳	③③	0	1
合計			22	26

(32)

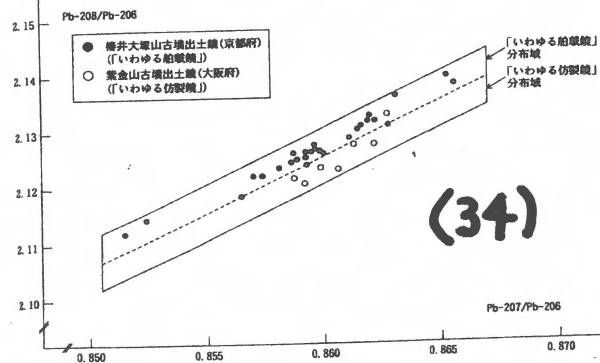
新しい形式の「4世紀型古墳(B群の古墳)」から出土した「いわゆる仿製鏡」と「いわゆる舶載鏡」の面数

No.	古墳名	同型鏡番号	いわゆる仿製鏡	いわゆる舶載鏡
(1)	京都府南原古墳	⑩⑩ ⑩③ ⑩④ ⑩⑤ ⑩⑥	0面	4面
(2)	京都府妙見山古墳	②③	1	0
(3)	山梨県甲斐銚子塚古墳	⑬ ②④	1	1
(4)	静岡県午王動山3号墳	⑦③	0	1
(5)	奈良県佐味田宝塚古墳	⑭⑮ ⑭⑯ ⑭⑰ ⑭⑱ ⑭⑲ ⑭⑳ ⑭㉑ ⑭㉒ ⑭㉓ ⑭㉔ ⑭㉕ ⑭㉖ ⑭㉗ ⑭㉘ ⑭㉙ ⑭㉚ ⑭㉛ ⑭㉜ ⑭㉝ ⑭㉞ ⑭㉟ ⑭㊱ ⑭㊲ ⑭㊳ ⑭㊴ ⑭㊵ ⑭㊶ ⑭㊷ ⑭㊸ ⑭㊹ ⑭㊺ ⑭㊻ ⑭㊼ ⑭㊽ ⑭㊾ ⑭㊿	1	14
(6)	山口県長光寺山古墳	②⑥ ②⑦ ②⑧	3	0
(7)	京都府垣内古墳	⑤⑦ ⑤⑧ ⑤⑨	1	2
(8)	佐賀県谷口古墳	②③ ②④ ②⑤ ②⑥	4	0
(9)	千葉県手塚古墳	②①	1	0
(10)	愛媛県相の谷1号墳	記載なし	—	—
(11)	滋賀県天王山古墳	②②	1	0
(12)	長野県森將軍塚古墳	⑦③	0	1
(13)	岡山県花光寺山古墳	②③	1	0
(14)	福岡県石塚山古墳	③⑤ ③⑥ ③⑦ ③⑧ ③⑨ ③⑩ ③⑪ ③⑫ ③⑬ ③⑭ ③⑮ ③⑯ ③⑰ ③⑱ ③⑲ ③⑳ ③㉑ ③㉒ ③㉓ ③㉔ ③㉕ ③㉖ ③㉗ ③㉘ ③㉙ ③㉚ ③㉛ ③㉜ ③㉝ ③㉞ ③㉟ ③㊱ ③㊲ ③㊳ ③㊴ ③㊵ ③㊶ ③㊷ ③㊸ ③㊹ ③㊺ ③㊻ ③㊼ ③㊽ ③㊾ ③㊿	0	7
(15)	神奈川県白山古墳	④⑤	0	1
(16)	兵庫県吉島松山古墳	② ③③ ④④ ④⑤	0	4
(17)	群馬県前橋天神山古墳	⑤⑦ ⑤⑧	0	2
(18)	京都府椿井大塚山古墳	表16参照	0	33
(19)	愛知県東之宮古墳	⑭⑮ ⑭⑯ ⑭⑰ ⑭⑱ ⑭⑲ ⑭⑳ ⑭㉑ ⑭㉒ ⑭㉓ ⑭㉔ ⑭㉕ ⑭㉖ ⑭㉗ ⑭㉘ ⑭㉙ ⑭㉚ ⑭㉛ ⑭㉜ ⑭㉝ ⑭㉞ ⑭㉟ ⑭㊱ ⑭㊲ ⑭㊳ ⑭㊴ ⑭㊵ ⑭㊶ ⑭㊷ ⑭㊸ ⑭㊹ ⑭㊺ ⑭㊻ ⑭㊼ ⑭㊽ ⑭㊾ ⑭㊿	0	5
(20)	京都府寺戸大塚古墳	④⑤ ④⑥ ④⑦	1	2
(21)	岡山県備前(湯迫)車塚古墳	表16参照	0	11
(22)	奈良県新山古墳	③② ③③ ③④ ③⑤ ③⑥ ③⑦ ③⑧ ③⑨ ③⑩ ③⑪ ③⑫ ③⑬ ③⑭ ③⑮ ③⑯ ③⑰ ③⑱ ③⑲ ③⑳ ③㉑ ③㉒ ③㉓ ③㉔ ③㉕ ③㉖ ③㉗ ③㉘ ③㉙ ③㉚ ③㉛ ③㉜ ③㉝ ③㉞ ③㉟ ③㊱ ③㊲ ③㊳ ③㊴ ③㊵ ③㊶ ③㊷ ③㊸ ③㊹ ③㊺ ③㊻ ③㊼ ③㊽ ③㊾ ③㊿	2	7
(23)	奈良県宮山古墳	②④	0	2
(24)	京都西車塚古墳	③③	0	1
(25)	京都府久津川車塚古墳	④① ④②	1	2
合計			18	100

(33) 「いわゆる仿製鏡」は古い古墳から、「いわゆる舶載鏡」は新しい古墳から

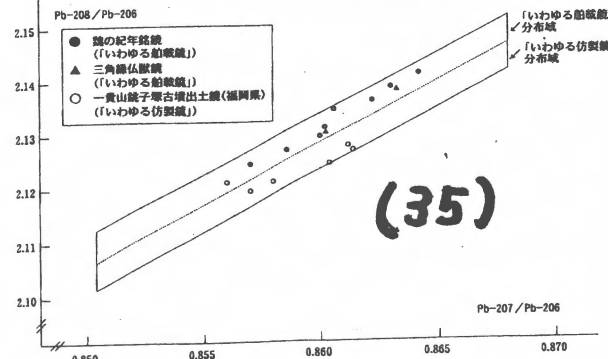
	いわゆる仿製鏡	いわゆる舶載鏡	計
A群の古墳	22面 (55.0%)	26面 (20.6%)	48面
B群の古墳	18面 (45.0%)	100面 (79.4%)	118面
計(百分率)	40面 (100.0%)	126面 (100.0%)	166面

椿井大塚山古墳出土鏡と紫金山古墳出土鏡の鉛同位体比



(34)

鏡の紀年銘鏡・三角縁仏獸鏡と一貴山銚子塚古墳出土鏡の鉛同位体比



(35)